
階段下マイホーム

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

階段下マイホーム

【Nコード】

N3802Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

桜草学園高等部に通う富永波徒^{とみながなみと}には気になる女の子がいた。それは星奈詩穂^{ほしなほ}。少しおとなしめの、クラスメイトの女の子だった。あるとき波徒は彼女から、私の家に来てと誘われる。行ってみるとそこは特別教室棟東側一階の階段下だった。彼女はそこに住んでいた。

それを知ってももちろん、彼女を好きな気持ちに変わりはない。放課後、彼女の『家』に行く波徒。

そこで異常な光を目にした。『家』には布団にもぐって寝る星奈と、

ひとりの少女の姿が。少女は星奈と手をつなげという。
その言葉に従うと、見たのは校庭の映像。そこでは巨大な黒い物
体『魔流』と星奈が戦っていた――。

ステップ1 いらっしゃい！ 彼女の家はこんな場所

「いらっしゃいませ」

床に敷かれた布団の上にちょこんと座った女の子が、横の戸棚から急須とお茶つ葉を取り出す。

保温ポットのボタンを押し急須にお湯を注ぎ、ゆっくりと湯飲みにお茶を淹れる。

そして座布団に座っている僕の前に、そつとその湯飲みを差し出してくれた。

「少しぬるいかもしれないけど……」

「あ……ありがとう」

緊張しながら僕はその湯飲みに手を伸ばし、お茶をひと口味わう。確かにちよつとぬるめだけど、とても美味しい、と思う。

でも、状況的にしっかりと味わうことなんかではしなかった。

僕は富永波徒^{とみながなみと}。今年、高校に上がったばかりの高校一年生だ。

僕の通う桜草学園^{さくらくさくわん}は、初等部、中等部、高等部が敷地内にまとまっている、いわゆるエスカレーター式の学校となっている。

学力レベルは中の上、といったところだろうか。一般入試も行われているので、初等部からずっと同じ顔ぶれだけ、というわけではない。そして僕も、そんな一般入試で入学したうちのひとりだ。

もともと女子校だったこの学園は、数年前から共学となったのだが、まだ女生徒の比率のほうかなり高かった。

もっとも僕はべつに、（まったくないとは言わないけど）それを目当てに入学したわけではない。

この学園の理事長が親戚に当たるため、強く勧められたのだ。

理事長は僕が入学したら、学園のすぐ近くに建つ自分の家に空いている部屋があるから、そこに住んで通えばいいと言ってくれた。なんでも、住まわせてあげるつもりだった人が申し出を断ったため、空いたままになっているのだとか。

住む部屋が用意されているのはよかったのだけど、さすがに理事長の一存で無条件に学園に入学させるわけにはいかず、普通に入試を受けて無事入学するに至った。

そして僕は今、理事長の家にご厄介になりながら、この学園に通っている。

長男である僕の下にはまだ、弟ひとりと妹ふたりも控えていた。長女が今年中学校に入学、次男が小学校五年生、次女は小学校三年生だ。

景気は長いこと底這い状態だからそろそろよくなるなどと言われながらも、実際には悪くなる一方という苦しい状態。

父さんの給料が十パーセントカットで、ボーナスもほとんど出ない現状では経済的に厳しいは確かだった。

もちろん質素な暮らしながらも家族一緒にいられるのが一番と、両親は必死に頑張って僕たちを育ててくれていたし、僕もそれなりに幸せを感じて生活してはいた。

だけど今後はもっとお金が必要となってくるだろう。

そう考えた僕は理事長からの申し出を快く受け入れて、お世話になることに決めたのだ。

学園に入学して驚いたのは、やはり女子の多さと、中学からエスカレーター式に上がってきた人の多さだった。

男女の比率は、二対八という感じだろうか。通っていた中学に関しては、自己紹介を聞いている限りでは八割くらいの生徒がこの学園の中等部からそのまま上がってきているようだ。

そんなクラスの中、僕には気になっている女の子がいた。それが
ほしなほ
星奈詩穂さんだ。

入学したての新たなクラスでは、ひとりずつ自己紹介させられるのが一般的だろう。ご多分に漏れず、このクラスでもやっぱりそうだった。

最初だから目立つのが肝心と、気合いの入った自己紹介をする人もいたけど、それは少数派。ほとんどの人が、名前と出身校を言う程度で済ませていた。

かくいう僕自身もそうだったのだけど。

そして、星奈さんの自己紹介もやはり、名前とこの学園の中等部から上がってきたという程度の、当たり障りのない感じだった。

どちらかというとしおとなしい印象を受ける雰囲気で、外見的にも、確かに可愛いとは思うけど、美人というわけではない。

でもなんとなく、一瞬見せたちよつとはにかんだ笑顔に惹かれた、と言えはいいのだろうか。とにかく気になったのだ。

話しかけたいとは思っていたけど、僕のほうも積極性に乏しい性格で、なかなかそばにも寄っていけない。

せめて席が隣だったりすれば、話しかけやすかったかもしれないのだけど。

「なあ、富永。お前さつきから、星奈さんのほうばかり見てないか？」

ホームルームが終わり、一時間目の授業が始まる前の時間に、後の席の男がニヤニヤしながら小声で話しかけてきた。

「な……！？ い、いや、そんなこと……」

「照れるなって。いいじゃんか。周りは女の子ばかりだし。目を奪われるのもわかるし」

「ほんとに、そういうわけじゃ……」

と言いつつも、語尾が弱まっていく僕。

確かに、星奈さんのほうばかりを見てたのは事実だったのだから、反論もできない。

「まあ、とりあえず。数少ない男同士、席も前後になったわけだし、よろしくな！ 俺は鳥河狩人^{とりかわかりと}。ま、ホームルームで自己紹介したから覚えてるか」

「あ……うん。この学園に初等部からずっと通ってて、中学から新聞部なんだよね」

「そうそう。ちゃんと聞いてたんだな。そういうわけだから、学園でわからないことがあったらなんでも聞いてくれよ。俺自身が知らなくても新聞部の情報網だってあるしな！」

そう言ってウィンクしてくる。

最初はいきなり心の中を見透かされたようなことを言われて驚いたけど、結構なじみやすい奴なのかも、と思ってホッとした。

「そうだな、例えばこの学園、数年前まで女子校だったけど、そのさらに前は共学の中学校だったらしい。エスカレーター式の総合学

園になるときに女子校にしたって話だ。かなり昔の話だけだな」
「へー、そうなんだ」

鳥河は、学園のことをいろいろと僕に教えてくれた。
新聞部員というのは、そうやって知識を披露することに喜びを見出す人種なのだろう。

「はい、みなさん静かにしてねー。授業を始めますよー」

そのうちに、小学校の先生のような明るい口調で、先生が教室に入ってきた。琴崎里子先生だ。
「こさきりこ」

こんな喋り方をしているのは、去年まで初等部の教師だったかららしい。

中学・高校の国語の教員としての資格もあり、もともとはそちらを望んでいたそうなのだけど、人手が足りなかった関係で初等部の担任をしていた琴崎先生。

今年からようやく、念願の高等部の担任としてこのクラスを受け持つことができるようになったのだという。

「じゃ、話はまたあとでな」

鳥河の声を背中に受けつつ、僕は高校最初の授業に集中し始めた。

休み時間になると、僕はまた後ろの席の鳥河と話をした。

鳥河が僕に話しかけてきたのは、席順がひとつ前だからというだ

けではなかった。

「実はお前と俺は親戚に当たるんだ。だから理事長とも面識があつて、あらかじめ話を聞いていたんだよ」

ということらしい。

親戚とはいっても、親の都合であまり親しく交流を持っていなかったらしく、僕はまったく知らなかったのだけだ。

「それにしてもお前、ほんとに星奈さんのほうばかり見てるよな。ま、気になるのはわかるけど、あまりにもわかりやすすぎるだろ」

鳥河はまたそんなことを言つて僕をからかい始める。

「う……、でもさあ……」

反論しようとするけど、言葉が続かない。

「ははは！ ま、いいじゃないか。できれば協力してやりたいとも思うんだけどな。でも、俺もあまり星奈さんとは親しくないんだ」

「そっか、残念」

「それに、彼女はちょっと……」

少し目を伏せて声を落とす鳥河。

「え？」

彼女はちょっと、なに？

僕は気になって訊き返していた。でも、

「いや、なんでもない。ともかく、お互い楽しい高校生活になるように、頑張ろうぜ！」

言葉を濁してそう締めくくった鳥河の声に合わせるかのように、始業のチャイムが鳴り響いてしまった。

すぐに先生が教室に入ってくる。僕は仕方なく前に向き直った。星奈さんのことが気にはなったけど、鳥河は結局それ以上にも話してはくれなかった。

ともかく入学初日に、面識はなかったとはいえ親戚と同じクラスで、しかもこんなすぐに打ち解けられたのは、幸先のいいスタートだと言えるだろう。

楽しい高校生活になりそうな、そんな予感がした。

昼休み、鳥河は購買に行くと言ってすぐに席を立った。

僕はお弁当持参だったので教室に残っていた。

理事長である伯母さんは忙しいのでお弁当なんて作っている時間はないのだけど、なんと伯母さんの家にはお手伝いさんがいるのだ。とはいえ、家自体はべつに豪邸というわけではない。

理事長をやっているし裕福な家庭をイメージしていた僕も最初見たときには少々驚いたのだけど、伯母さんの家はごくごくありふれた普通の住宅だった。

お手伝いさんも住み込みというわけではなく、朝早くに出勤し、伯母さんの家の台所を使ってお弁当の準備をしているのだという。

もちろんお手伝いさんは、僕のために雇ってくれたというわけではない。

伯母さんにもふたりの子供がいる。幼稚園の男の子と小学校に上がったばかりの女の子だ。

そのふたりの面倒を見てもらったり、幼稚園のお子さんと伯母さん用のお弁当作り、家の掃除・洗濯などを任せるために雇っているそうだ。

ありがたいことに、僕のお弁当もそのお手伝いさんが作ってくれていた。

伯父さんのほうはなにをしているのかというと、とあるIT系企業のロサンゼルス支社で働いており、現在はアメリカに住んでいるとのこと。

なので、僕は一度も伯父さんには会っていない。さすがに伯母さんは寂しい思いをしているのではないだろうか。

ともかく僕は、持参したお弁当を広げてひとり食べ始める。

教室を見回すと、女子はいくつかのグループがすでにでき上がっているのか、机をくっつけてお喋りしながらお弁当を食べているのが、そこかしこで見られた。

どうも男子はこの女子だらけの空間にいるのが居心地悪いのか、ほとんどの人が食堂へ行ったり、お弁当を持ってきていても教室の外で食べたりしているようだった。

女子たちの喋り声や笑い声が響く中、僕はひとり、窓から外を眺めながらお弁当を食べていた。

窓からは、校門を入るとすぐ目の前に広がるロータリーが見渡せる。噴水を真ん中に配置したロータリーの周りには、たくさんの桜の木が植えられていた。

桜の花びらが舞い散る光景を見ながら、僕は黙々とお弁当を口に

運ぶ。

ふと教室に目を向けると、星奈さんと目が合った。僕はなんとなく恥ずかしくて、すぐに目を逸らし、お弁当を食べ続けた。

「あの……」

不意にかけられた声に顔を上げると、星奈さんがすぐそばまで近寄ってきていた。

「あつ、えつと……。ども……」

どんな対応をすればいいのかわからず、わずかに微笑みながらも僕の顔はちよつと引きつっていたかもしれない。

そんな様子はわかっていただろうけど、あまり気にする様子もなく、というより星奈さんのほうも気にする余裕がないような感じで、彼女は視線も合わせずに言葉を続けた。

「突然こんなこと言うのも変かもしれないけど……」

そこで一旦区切り、息を吸い込んで呼吸を整えるかのように間を取ったあと、彼女は確かにこう言った。

「放課後、一緒に私の家まで来てください！」

そんなわけで僕は、星奈さんの家に招待されて、今この状況になっ

湯飲みに口をつけながら星奈さんに視線を向けると、彼女も顔を伏せて上目遣いでこちらを見ていた。

そして僕の視線に気づくと、彼女はすっと視線を逸らす。

どうしたらいいのかな……。というより、すごく気になる、というか、えーっと、なんと言っているのやら……。

だって、ここは……。

ふと、足音が響く。

「でさー、そのとき、あいつが……。あつ」

僕が後ろを振り向くと、制服姿の女生徒と目が合った。

友人と三人で階段を下りてきて、この先の家庭科室に向かうところなのだろう。家庭部、という部活があるのも、この学園が女子の多い高校だからと言えるのかもしれない。

「あ……どうも……」

困ったような愛想笑いを浮かべる僕を見て、女生徒たちは軽くお辞儀をし、廊下を歩き去った。

そして僕は再び前に向き直る。

そう、目の前にいる女の子、星奈詩穂さんの『家』というのは、ここ、高等部の特別教室棟一階、東側の階段下だったのだ。

沈黙が続いた。

放課後を迎えた特別教室棟の廊下は、とても静かだった。まだ夕方、日も沈んでいない時間だというのに。

学校内には部活のために残っている生徒も多いはずだけど、その

声はこの場所までは届いてこない。僕の発するお茶をすする音だけが、微かに響く。

その静寂を止めたのは星奈さんの小さな声だった。

「あの……。ごめんね。変でしょ？　こんなとこに住んでるなんて」

本当に申し訳なさそうに顔を伏せたまま、星奈さんは震える声でつぶやいた。

「いや……。ちょっと驚いたけど……。でもいろいろと事情があるんだよね？　聞いたら悪いかなどとは思っけど……」

「そんなことないよ。……えっとね、私はここの元理事長の娘なの」

星奈さんは、淡々と話し始めた。

「校舎内に理事長室があるでしょ？　……あつ、入学したばかりだから場所まではわからないかな？　とにかく理事長室はちょっと広めの部屋で、さらに奥にもうひと部屋あるの。そこで生活もできるようになっていて、私たち家族はそこに住んでたんだ。でも、両親とも、死んでしまって……」

私は小学生だったんだけど、理事長室も次に来た理事長さんが使うことになるから出ていかなくてはならなかったの。頼れる親戚もいなくて、どうしていいかわからなかった……。でも両親の思い出が詰まったこの学校からは離れたくなくて。それで、新しい理事長さんに頼み込んで、学校の一角で住まわせてもらえることになったの」

僕は、ただ黙って聞いていた。かける言葉が見つからなかったのだ。

つい困ったような表情もしてしまっていたのだろう、星奈さんは

努めて明るい声で喋り続けた。

「あつ、でも、気にしないでね。私は今の生活、結構気に入ってるんだ。両親とずっと一緒だったこの学園にいられるんだもの。学費も、そのうち返さないとはいけないけど、今も理事長さんが出してくれているの。本当に助かってるわ」

……あれ？

そこまで聞いて、僕は気づいた。

今の理事長といえば、僕の伯母さんじゃないか。でも伯母さんは、僕がご厄介になっっている、学園のすぐ近くに建っている家で生活している。理事長室に住み込んでいるわけではないと思うけど……。

さすがに夜だけ理事長室の奥の部屋を星奈さんに使わせる、というわけにはいかなかったのかな。

そういえば、部屋を誰かに貸すつもりだったけど断られた、とも言っていた気がする。それってもしかしたら、星奈さんのことだったのかもしれない。

あとで伯母さんに訊いてみよう。

「あまり生徒の学園生活に支障がない場所で、とは言われていたんだけど、でもやっぱり屋根はないとダメだし、校舎内をいろいろ探してみても、ここに決めたんだ」

僕がいろいろ考えを巡らせているあいだも、星奈さんの話は続いていた。

複雑な表情を浮かべながら話す星奈さん。今の生活が気に入っているとはいっても、大変なのは確かだろう。

なにか僕でできることがあるなら、力になってあげたいな……。

そこでふと思い出した。

星奈さんはどうして僕をここに呼んだのだろう？

今話している内容を伝えるため、というわけではないと思う。いくら人通りが少ない場所とはいえ、ここに住んでいるというのは中学からこの学園にいる人にはわかってはいるはずだし、やがて僕もどこかで知ることにはなったと思う。

あらかじめ、どうしても自分から話しておきたい、という内容でもないはずだ。

「あの、星奈さん。……どうして僕をここに呼んだの？」

ストレートに訊いてしまうのもどうかとは思ったけど、やはりはつきりさせておきたかった。なにか心に引かかる感じがあったからだ。

星奈さんは話を止め、黙ってしまった。

しばらく考えているようだったけど、やがて僕のほうに顔を向ける。

「あのね。……私、なんだか富永くんのが気になってしまっ……。それで……」

星奈さんは頬を赤く染めながらそう言った。

それって……。

僕は鼓動が高鳴るのを感じた。僕も星奈さんのことが気になっていたんだ、そう声にする前に、星奈さんはさらに言葉を続けた。

「それに、れーこちゃんにも言われて……」

言ったあと、あつ、と小さな声を上げて目を逸らす彼女。

「れいこちゃん？」

「あつ、うん……。私の……友達」

でも、クラスメイトには「れいこ」という名前の女の子はいなかったように思う。

もちろん全員の名前をしつかりと覚えているわけではないのだけ
ど。

他のクラスの子なのだろうか。

また、沈黙が続いた。

西陽が窓から差しきて、星奈さんの顔を照らす。

僕のほづをじつと見つめている彼女の瞳が、不思議なほど、きら
きらと輝いているように見えた。

さっきの話で、わずかに涙がにじんでいたのかもしれない。

「あ……ごめんなさい、もうこんな時間。帰ったほうがいいよね、
すぐに暗くなっちゃうし。今日はお話を聞いてくれてありがとう」

すつと立ち上がって言う星奈さん。それに合わせて、僕も立ち上
がる。

まだ一緒にいたい、なんて言えはしなかった。

「また、来てね」

階段のそばから廊下を歩く僕に手を振り、彼女は笑顔で見送つて
くれた。僕も彼女に大きく手を振って、その場をあとにした。

「伯母さん」

十時過ぎ、僕は帰宅したばかりの伯母さんが居間のソファに座るなり、質問をぶつけてみた。

「星奈詩穂さんって知ってるよね？ 部屋を貸すつもりだった人で、もしかして星奈さんのこと？」

「ん？」

伯母さんは意外にも首をかしげる。

「誰だい、それは？」

「えっ!？」

僕にはなにがなんだか、よくわからなかった。

確かに伯母さんが、星奈さんのご両親のすぐあとを継いで理事長になったわけではないかもしれない。

だからあの場所に住むことを許可したのは別の人なのかもしれないけど。

でも星奈さんは、今も理事長さんが学費を出してくれていると言っていた。それを知らないというのは、ありえないと思うのだけど、星奈さんが偽名を使っているのかもしれない、とも考えたけど、そんなことをしてもあまり意味はないだろうし……。

「ん？ どうしたんだい？ その子がどうかしたの？」

「い……いや、なんでもないよ」

思わず黙り込んでしまう僕。

伯母さんは「なんだい、この子は？」とでも言いたげに、こちらをじっと見据えていた。

「伯母さんって、いつから桜草学園の理事長をやってるんだっけ？」
「ん？ どうだったかねえ。もう六、七年くらいは経ったと思うけど」

そうすると、ちょうど星奈さんのご両親が亡くなった頃になるわけだから、そのあと理事長の地位を継いだのが伯母さん、ということになるはずだ。

それなのに、どうして星奈さんのことを知らないなんて言うのだろう。

「それがどうかしたのかい？ 今日疲れててね。用が済んだのなら、もう休ませてもらうよ」

そう言っただけで伯母さんは部屋に入ってしまった。

ひとり取り残された僕は、しばらくその場で立ち尽くしてしまっただものの、急に寒気を感じて部屋に戻った。

春とはいえ、まだ夜は涼しいな。……気温だけの問題ではなかったのかもしれないけど。

部屋に戻ってから、僕はいろいろと考え込んでいた。

伯母さんにもっと細かく訊きたいとは思った。だけど、深く立ち入ってはいけない話なのかもしれない。

伯母さんが嘘をついていると考えるのも怖いけど、星奈さんが嘘をついていると考えることのほうが怖かった。

……そうだ、きつとどちらかが思い違いをしているとか、そういう感じなんだよ。

僕はそれ以上考えないようにして、布団を頭からかぶる。

すぐにでも眠ってしまいたかったけど、なかなか寝つけなかった。とはいえ、何度も布団をかけ直したりしながら時間だけが過ぎていくと、夜も更ける頃には、僕はいつの間にか眠りの世界へと落ちていた。

ステップ2 縮めよう！ 心の距離をちょっとずつ

「富永、お前昨日、星奈さんの『家』に行ったんだってな」

次の日学校に行くとともに、後ろの席の鳥河がニヤニヤしながら話しかけてきた。

「ああ、うん」

「びつくりしただろ。あんなとこに住んでるなんて」

「うん、まあ、そうだね。星奈さんがあの場所に住んでるのは、結構有名なことなんだよね？」

「そりゃあな。今年入ってきた奴らだとわからないかもしれないが、前からこの学校に通っていて知らない生徒はそうそういないんじゃないかな。初等部だと知らない奴もいるかもしれないけど。校舎もちょっと遠いからな」

桜草学園の敷地は、初等部、中等部、高等部が横並びになっていて、それぞれ結構広い敷地を持っているのだ。

でも、その程度の距離だとあまり関係なさそうな気もするけど。

「お前、完全に星奈さんにお熱ってわけだな」

ニヤニヤ度を増してからかい気味の言葉をぶつけてくる鳥河。今どき「お熱」って死語じゃないだろうか。

「べつに、そういうわけじゃ……」

「でもな……」

声のトーンを落とし、鳥河は急にまじめな顔になる。

「水を差して悪いが、彼女はちょっと、やめておいたほうがいいかもしれない」

「え？」

思わず後ろの席に身を乗り出す。さらに顔を近づけ話し続ける鳥河の話に、僕は耳を傾けた。

「まあ、なんというか……昨日もちよつと言いかけたが、結構変わってるんだ、星奈さん」

昨日の星奈さんとの話からわかっていただけ、彼女は初等部からこの学校にいるらしい。それは問題ないのだけど、その頃から変わった感覚を見せ始めていたそうだった。

きっかけは、とある事件。

詳細は明かされていないし、新聞部の情報網を持っても謎に包まれたままらしいけど、学園で殺人事件と思われる怪死事件が起こったのだという。

殺されたのは、当時の学園の理事長と、副理事長だったその妻。

深夜、理事長室でふたりは亡くなった。完全な密室だったことから無理心中の可能性も考えられたのだけど、遺書も見つからなかったそうだった。

事件・事故の両面で警察が調査を続けたものの、決定的な証拠などは見つからなかった。もし殺人事件のだとしたら、犯人は未だ捕まらずに逃走していることになる。

そしてその頃から、学園内でいろいろな怪現象の目撃例が多発するようになった。

学園にありがちな七不思議だとか、そういった噂が不思議なほど

なかったこの学園だけに、その急な変わりようは驚くべきものだったらしい。

「それでな。その怪死した元理事長と副理事長のふたりというのが、星奈さんの両親なんだ」

星奈さんのご両親が元理事長で、亡くなってしまったことは昨日聞いていたわけだけど、よもやそんな怪死事件が原因だったなんて……。

その事件のあと、新たに理事長として赴任してきたのはやっぱり僕の伯母さんだったようだ。でも僕は、そんな話は一度も聞いたことがなかった。

伯母さんは僕を不安にさせないために、あえて話さなかったのだろうか。

理事長の娘として初等部の一年生からこの学園に通っていた星奈さん。少なくとも、はたから見れば楽しそうに過ごしていた。

だけどその事件の際、怪死したふたりの死体のそばで、血まみれになって泣いている彼女が見つかった。

当時初等部の三年生だった彼女は、しばらく心を閉ざしてしまい、入院していたらしい。そして退院して戻ってきた彼女からは、明るかった面影はまったく消えていたのだという。

「まあ、周りも心配して、心配されていることを本人もわかっていて、徐々にはあるけど心を開いてきているのは確かだろう。とはいえ、おとなしい印象を受けるのは、まだ完全には立ち直れていないってことなんだろうな」

……そうだったのか。

でもそれならなおさら、彼女が明るく過ごしていけるように元気

づけてあげたい。

そう考えていると、鳥河はさらに言葉を続けた。

「でな。変わってるというのは、彼女の言動のせいでもあるんだ。さっき言った怪現象だけど、調べてみると高等部特別教室棟の東階段の近くで起こっていた場合が多いらしい。つまり、事件以来、星奈さんが住んでいるあの場所だ。

今ではそういった怪現象も鳴りを潜めているみたいだが、普通なら、ただでさえ夜の学校は怖いイメージがあるだろ？ その上そんな怪現象の噂まで流れた場所で生活し続けているというのは、やっぱり変じゃないか？

それに、夕方ふとあの場所に近づくと、星奈さんしかいないはずなのに複数の声が響いてきていた、なんていう家庭部員の証言もある」

鳥河は顔を近づけ、声のトーンを落とし、おどろおどろしい口調で語った。

そういった演出を加えるのは、新聞部としての性^{さが}なのだろうか。

「まあ——」

ぱつと、明るい表情に戻った鳥河は僕の肩をポンポンと叩き、

「やめておけと言われてやめるわけもないよな。せいぜい頑張れよ！」

最初と同じようなニヤニヤ顔を浮かべながら、そう言い残して教室から出ていった。

……って次、まだ三時間目では……。

ふと気づくと、黒板には大きく「自習」の文字が書かれていた。

放課後になった。

鳥河からあんな話を聞いてしまい、僕は星奈さんが今まで以上に気になっていた。

彼女はやめておけ、鳥河はそう言っていた。でも、僕にはどうしても彼女が気になって仕方がなかった。

単純に彼女に惹かれている、というのもないわけじゃない。ただ、よくはわからないけど、それ以上のなにかを感じるような気がしていたのだ。

とはいえ、僕はなかなか積極的になれない性格。

帰り支度を整えてカバンを手に取りとうとしている星奈さんと目が合ったものの、僕はずっと視線を逸らしてしまった。

彼女は多分、しばらくこっちを見ていたと思う。それなのに僕は結局、彼女のほうに視線を向けることができなかった。

やがて、星奈さんはカバンを持って教室を出ていった。

僕は……なにをしているんだろう。

だけど、あまり関わらないほうがいいのかもしれない、そんな思いも浮かんでいた。

——帰ろう。

カバンをつかんで席から立ち上がろうとする僕を、不意に呼び止める声があった。

「富永くん」

名前を呼ばれて振り返ると、そこにはショートカットの女子生徒が立っていた。

星奈さんは、いろいろと悪い意味で有名らしく、鳥河がやめておけと言っていたように、あまり近づかないようにする人も多いみたいだった。

そんな中でも、よく星奈さんと一緒にいるの見かける女子。確か名前は小松真子こまつまこさんだったと思う。昼休みには星奈さんと机を並べて一緒に弁当を食べている友人のようだ。

もちろん、僕が彼女から話しかけられたのはこれが初めてのことであった。

「小松さん……？ えっと、なに？」

なるべく不審な感じにならないように努める。

星奈さんを意識している僕。その友人である彼女と接することすら、少々緊張を感じてしまった。

「突然ごめんね。あの、富永くん。……えっと、聞いたよ。詩穂の『家』に行ったんだって？」

家……それはもちろん、星奈さんの住んでいる特別教室棟階段下のあの場所だ。

僕は一瞬ためらったけど、正直に頷いた。

「あのさ、こんなこと頼むのも変かもしれないけど……よかったら、あの子を元気づけてあげて！」

小松さんは胸の前で両手を組み、僕を拝むような形で懇願する。彼女の話によれば、どうやら星奈さんはこの頃、理由はよくわからないけど元気がないらしい。

小松さんは初等部から星奈さんと同級生で、一緒にいることが多かった。星奈さんの両親が亡くなったあの事件のあとは、とくに心配して気遣っていた。

以前ほどの明るさは取り戻せていないものの、星奈さんは自分にはある程度心を許してくれている、そう彼女は考えていたようだ。

それなのに元気がない理由を一向に話してくれない星奈さん。小松さんはべつに怒っているわけではない。星奈さんのことが、純粹に心配なのだ。

「詩穂と知り合ってすぐの富永くんに頼むのも、おかしい話かもしれないけど……。詩穂は『家』のことをすごく気にしているみたいで、いつもは人が通ると隅っこに隠れたりするくらいなの」

小松さんは僕の目をじっと見据えていた。

「それなのに富永くんを、詩穂のほうから『家』に招いてたから……」

昨日星奈さんから家に来たと誘われたとき、小松さんも教室にいたと思う。その様子を、おそらく複雑な思いで見っていたのだろう。

「だから、富永くんなら詩穂を元気づけてあげられるかなって……」
ぼそぼそとつぶやく小松さんを、僕はただ黙って見つめていた。

「あははっ！ ごめんね。親友だと思ってたのに、ちょっと嫉妬しちゃってるのかも、私」

小松さんは不意に明るい笑い声を響かせると、僕から顔をそむけた。

そして、「それじゃあ、よろしくね」とだけ言い残して、足早に教室を飛び出してしまった。

どうしよう……。

でも、あんなふうに言われたら、行かないわけにもいかないよね。僕は意を決して、星奈さんの『家』に向かうことにした。

カバンをつかんで立ち上がる。

……と、なにかが床に落ちた。

それは胸ポケットに入れてあった生徒手帳だった。

学生は生徒手帳を肌身離さず常備すること。一応校則で決まっている。

もともと、実際にはカバンに入れっぱなしだったり、持ってきていない人も多そうだけど。普段は必要のない物だし。

だけど、根が真面目な僕はちゃんと常備していた。……自分で「真面目」なんて言っと、どうしてこうも胡散臭く思えるのだろう。

ま、それはともかく。

さすがにボタンもついていない胸ポケットに入れておくのは、問題があったかな。屈んだ拍子に落ちる可能性も高いし。

僕は床に落ちた生徒手帳を拾い、ズボンのポケットに入れ直すと、静かに教室をあとにした。

「来てくれたのね！」

明るい笑顔でお茶を出してくれる星奈さんに、少し戸惑ってしまった。

でも、ここまで喜んでくれるなんて。やっぱり来てよかった。

「お邪魔します」

一応『家』なのだからと思い、僕はそう言ってから用意された座布団の上に座った。

星奈さんは上履きを脱いで、敷いた布団の上に座っている。僕もそれにならない彼女の上履きの横に自分の上履きを並べた。

「もう来てくれないかと思った……」

「僕のほうこそごめんね、その、目を逸らして避けたりして……」

「うっん、大丈夫よ。……慣れてるから……」

寂しそうな声でつぶやく彼女。僕はなにも言えずに湯飲みを手に取って口に運ぶだけだった。

……でも、いったいなにを話せばいいんだろう。

ここまで来てみたはいいけど、まったく会話が続かない。

こんなじゃ、本当にお邪魔しに来ただけになってしまう。

かといって思い浮かぶ話といえば、ご両親が殺されていたという

ことや伯母さんが星奈さんを知らなかったことといった、訊いてしまつていいのかわからないような内容ばかりだ。

僕は結局、なにも話し出せず黙つてしまつていた。星奈さんのほうも、どうしたらいいのかわからず困惑している様子だった。

ふと、上のほうから微かに女の子の声が響いてきた。昨日と同じで、家庭部の子が部室へ向かうために階段を下りてきているのだろう。

二度目ともなれば、こちらでも慣れたもの。

階段を下りてきたのは昨日とは違う子だったけど、ちらりとこちらに目を向けた彼女たちに軽く会釈をする。

すると、彼女たちも軽く頭を下げ、足早に廊下を歩いていった。

「……慣れれば、どうつてこともないね」

星奈さんに向き直つてそう言う僕に、彼女は驚いた表情を浮かべる。

「すごいね、富永くん。私、慣れるまで、すごく時間がかかったよ」

星奈さんの場合はひとりでここにいたわけだし、ご両親の件も起こつたすぐあとだったはずだから、僕の状況とは違つただろうけど。

とはいえ、わざわざそれを指摘する必要もないだろう。

「あはは。僕つて結構、神経が図太いのかもね」

「ふふふ。私もよく言われるんだ。ずっと学校に住み着いて神経図太いつて。仲間だね！」

そんなことを言われたときの星奈さんは、もちろん嬉しかったわけはないだろう。

でも、今僕と顔を合わせて笑っている彼女を見ると、神経が図太い仲間としてここにいってもいいかな、なんて思えてしまう。

なんにしても、自然と会話を再開することができた。

通りかかった女生徒たちに感謝しながら、僕は会話が途切れないうちに、他愛のない話ばかりではあったけど星奈さんとふたりで語らい合う時間を過ごした。

もう夕方になっただろうか。肝心な話にはまったく触れていないけど、訊いてしまうのをためらうような内容でもあるし、僕はこんな感じで星奈さんと仲よく話せればいいかなと、そう考えるようになっていた。

そのうち、彼女のほうから話してくれるようになるかもしれない。

「あつ、ごめんね。それじゃあ、そろそろ帰るよ」

「そうだね、暗くなっちゃう。今日は楽しかったよ。来てくれてほんとにありがとう」

笑顔で僕を見送ってくれる星奈さん。本当に、来てよかった。

小松さんは、星奈さんの元気がないと言っていた。だけど僕と話している彼女を見ている限り、そんな沈んだ雰囲気は感じられなかった。

小松さんの気のせいならいいのだけど、もしかしたらまだ僕に完全に心を許していないから、なにも言ってくれないだけなのかもしれない。

明日からも、僕は彼女の『家』を訪れよう。そう心に決めていた。

下駄箱の前で上履きから靴に履き替える。と、僕はズボンのポケットに違和感を覚えた。

すぐに手をつ込んで確認する。

——あつ、生徒手帳がない！

ポケットの中は空っぽだった。

教室を出るときにズボンのポケットに入れ替えたのだから、そのあとで落としたとすれば——星奈さんの『家』で座布団に座ったときしかなさそうだ。

星奈さんが見つけて、明日渡してくれるかもしれない。そうは思っただけど、本当に星奈さんのところで落としたと断言できるわけでもない。

僕は再び上履きに履き直し、薄暗くなった廊下へと舞い戻った。

夕陽も沈み、外はもう夜の闇が包み込み始めている時間だ。

人のいなくなった学校っていうのは、やけに静かですごく寂しい場所のように思えた。

そんな校舎の一角で、星奈さんは暮らしている。彼女はどんな気持ちである『家』に住み続けているのだろうか。

ふと星奈さんの笑顔が頭の中に浮かぶ。

でも、なんとなくその笑顔の裏に寂しさが混じっていたようにも感じるのは、廊下の薄暗さから引き起こされた錯覚だろうか。

特別教室棟に入り、廊下を曲がる。ここを真っ直ぐ行った先の右手にある階段の下が、星奈さんの『家』だ。

——と。

その階段辺り、まさに彼女の『家』のほうから、まばゆい光が溢れ出しているのを見た。

——な、なんだあれは！？

光は一瞬で収まった。廊下はすでにもとの薄暗がりに戻り、寂しいほどの静寂に包まれている。

思わず呆然と立ち尽くしてしまっていた僕だったけど、すぐに階段下のあの場所へ向かって駆け出していた。

ステップ3 急展開！？ 彼女のヒミツとセーラー服

「星奈さん、いる！？」

僕は東階段の階段下の空間、すなわち星奈さんの『家』のすぐ横まで駆け寄ると、叫んだ。

「あら、こんばんわ」

そこには、しっかりと布団に潜って眠っている星奈さんと、そのすぐそばで正座している女の子がいた。

声をかけてきたのは、その正座している女の子のほうだった。

「えーっと……」

君は誰？

そう尋ねるよりも早く、昨日星奈さんから聞いた名前を思い出す。

「君が、レイ子さん？」

「え？ れいこ……ああ、うん、そうね、そう呼ばれてるよ」

少々戸惑い気味には見えただけ、僕の言葉を肯定する彼女。

レイ子さん——どんな字を書くのかはわからないから、こう記載しておく——は、星奈さんが眠る横に座布団を敷いて、ちょこんと正座していた。

僕は面識がなかったけど、この学園の高等部の制服を着ている。名前を聞いたときに考えたとおり、別のクラスの子なのだろう。

「ここで、なにをしてるの？ それに星奈さん、寝ちゃってるみた

いけど」

もしかして僕はお邪魔だったのかな、とか変な想像までしてしま
った。

「詩穂、ちょうど今、現場に向かったところなのよ」

「現場？」

僕には、彼女がなにを言っているのかわからなかった。

「うん……」

と、布団をかけて眠っている星奈さんが寝返りを打つ。

布団がまくれ上がり、星奈さんの上半身があらわになった。とい
つても、もちろん服は着ている。着ているのだけど……。

僕は思わず顔をそむけた。

べつに露出度の高いような服を着ていたわけじゃない。普通のパ
ジャマだ。薄いピンク色の可愛い柄物のパジャマ。

ただ、暖かい陽気にもかかわらず布団を肩までしっかり掛けてい
たからなのか、ほのかに赤く汗ばんでいて、胸の部分のボタンも上
からふたつ目までは留められていない状態。

その隙間から、星奈さんの綺麗な白い肌が見え隠れしていた。

顔を真っ赤にして、じろじろと見てはダメだと思いつつも、つ
いつい視線は彼女の肌へと吸い寄せられてしまう。

「……ちよつとお。あんた、詩穂をいやらしい目で見ないでよね」

ジト目で僕を睨むレイ子さん。

そうだった、すぐそばには彼女もいたのだ。それに気づいた僕は

余計に恥ずかしくなり、さらに真っ赤になっているのが自分でもわかった。

「えっと、その……。べつに、僕は……」

なにか弁解の言葉を、とは思っものの、まともな声にすらならず、僕はただひたすら焦りまくる。

そんな様子を、レイ子さんは薄ら笑いを浮かべて見つめていた。

「ふふふ。なんだか新鮮だね。……まあ、とりあえず落ち着いて」

そう諭されてから実際に僕が落ち着きを取り戻すまで、優に数分はかかった。

「そろそろ落ち着いた？」

レイ子さんはいたずらっぽい微笑みを浮かべながら、僕の顔をのぞき込む。

「えーっと、どうにか……」

言いながらも、ついつい視線はちらちらと星奈さんのほうに向いてしまう。

単に暑いからなのかと思っていただけ、どうやらそうではなさそうで、さっきから星奈さんは身をよじったり大きな寝返りを打ったりしていた。

彼女の額にはかなりの汗が浮かんでいるのも見える。

「うー……ん……」

再び身をよじった星奈さんの腕が布団から投げ出され、白くて小さな手のひらがあらわになった。その手のひらも、暑さからほかに赤みを帯びているのがわかる。

彼女が動くたびに、汗で額に張りついた髪の毛が、決して発育がいいとは言えない星奈さんを妙に色っぽく感じさせていた。

「……全然落ち着いてないじゃない」

「あつ、いや、その……」

レイ子さんの声で我に返り、星奈さんから視線を逸らす。
でもこの状況では、どうしても気になってしまっわけ……。――

「だ……だいたい、どういうことなの？　こんなに騒がしく話してるのに星奈さん全然起きないし、それに汗もかいてて苦しそうに見えるんだけど……」

僕は戸惑う気持ちを抑えるために、レイ子さんに食ってかかる。

「だから落ち着いたら話そうとしてたのに。ほんっと、新鮮だわあ」

レイ子さんはそんな僕の様子を見て、コロコロと大口を開けて笑い始めた。

そこまで笑わなくてもいいのに。ついつい不満顔になってしまったけど、それも彼女を喜ばせてしまう結果になるだけだった。

「ま、それじゃあそろそろちゃんと説明しましょうかね。うーん、でも、ごちゃごちゃ言うより見てもらったほうが早いかな」

レイ子さんは、あごに右手の人差し指を添えて考える仕草をする。

星奈さんのことばかり気になっていたからか、よく見ていなかったけど、レイ子さんは長い黒髪で、座っているからわかりづらいくど背も少々高めのもので、すらっと細い感じなのに出るべきところは出ていて……。

なんというか、星奈さんよりもずっと女性らしく綺麗な印象だった。

……って、僕はいつたいなにを考えているんだか。

思わず考えていることが顔に出てしまっていたのだろっ、そんな僕の様子にレイ子さんはジト目を向けていた。

視線がとても冷たい気がする。

レイ子さんの「レイ」の字は、「冷」って書くのかな。なんて、ちよつとひどいかもしれない考えが頭をかすめた。

「……ま、無礼は見逃してあげるとして」

背筋が凍る思い。本当に考えていることが筒抜けなのでは……。そんな僕の思いをよそに、レイ子さんは言葉を続ける。

「とにかく、あなた。詩穂と手をつなぎなさい」

「え？」

思いもよらなかった言葉に、驚きの声を上げる。

「詩穂、寝てるってわけでもないのよ。ま、手をつなげばわかるわ」

レイ子さんの目には、さっきまでの僕をからかっているような様子はない。至って真剣な眼差しを向けていた。

だからこそ僕は、彼女に促されるまま星奈さんの手を握った。

少々汗ばんだ温かな手。

柔らかい。そう感じた、刹那。

——！？

脳裏にまばゆいばかりの光がほとばしる。

そして、視界は一変した。

ここは、どこだ？

薄暗い空間にうごめく巨大な物体が、僕の目の前にはあった。

漆黒の中にあつてなお暗い塊、その物体の上方には赤い不気味なおぼろげな光がふたつ、こちらを見下ろすかのように輝いている。

それが目であるのは、直感的にわかった。とすると、この巨大な物体はなんらかの意思を持つてうごめいているということか。

と、その物体の周囲を飛び回る小さな影の存在に気づく。

ひらり、布のようなものが空気の流れに弄ばれるかのように舞っていた。

——星奈さん！？

そう、その影は、星奈さんだった。

薄暗くてよくはわからなかったけど、どうやらセーラー服を身にまとい、巨大な物体の周りを飛び回っている。

顔もよく見えないけど、それが星奈さんだというのは確信できた。

「なんだよ、このでつかいのほ！？ それに、星奈さんはなにを…」

思わず疑問が声となって溢れ出ていた。

「その巨大な物体は『魔流^{まりゅう}』よ。そして、詩穂はその魔流と戦っているの」

僕の疑問に答えるレイ子さんの声が、すぐ近くから聞こえた。ということは、今目の前に見えている映像は、幻？

——いや、違う。

今見えているこの場所は、薄暗くて気づかなかったけど、この広さと囲っているフェンスや周辺に見える建物の影から察するに、この学校の校庭だ。

そして、巨大な物体——『魔流』は、校庭の地面から生えているかのように見えた。

実際には別の空間から校庭を通じてこの世界に現れた、といったところか。

「あら、なかなか理解が早いわね」

レイ子さんの満足そうな声が響く。

もちろん、ちゃんと理解しているとは言えない。それどころか、これは夢なのでは、という思いのほうが強いのは確かだったのだけだ。

それでも、星奈さんとないだ手の温もりはしっかりと僕に伝わ

つてきていた。

魔流と呼ばれた巨大な物体を翻弄するかのように飛び回り、手のひらから光を放つ星奈さん。

その光の筋は、か細く、巨大な魔流に大した痛手を与えられていないのは明白だった。

「手数で勝負なの。詩穂にはそれしかできないから。今までもずっとそうだった」

そうつぶやくレイ子さんの声は少し苦しそうに聞こえた。

「でも……」

星奈さんが飛ぶ。

魔流の一部が、まるで巨大な腕のように伸び、振り回される。それを星奈さんは軽々と避け——と思った瞬間、反対側から伸びていた魔流の別の腕が星奈さんの背中に襲いかかる。

「きゃっ！」

星奈さんの悲鳴が、響いた。

僕は思わず、ぐっと力を込める。

彼女とつながったままになっていた手のひらに。

汗ばんだ柔らかな彼女の手のひらを、力強くぎゅっと握る形となった。

多分、痛いと思われるほどに強く。

——と。

ドクン。

つながった手のひらを伝って、星奈さんの鼓動が感じられた。そしてそれは、僕の鼓動でもあった。

重なり合ったふたつの鼓動が、汗で滑りそうになる手のひらを伝って彼女に——星奈さんに流れ込む。

「うん、やっぱりそうだわ！ 今は、あなたがいる！」

レイ子さんの力強い声を感じながら、僕はその光景を眺めていた。星奈さんの手のひらから放たれる、さっきまでとは比べ物にならないほどの光の奔流を。

光は一直線に魔流を貫く。

地面をも揺るがすほどの激しい咆哮を響かせながら、真っ黒な巨体が崩れていく。

校庭の中へと沈み込むかのように魔流は見る間に潰れていき、そして、消え去った——。

辺りは、闇に包まれていた。

でも、目に飛び込む薄暗がりの景色は、さっきまで見えていた校庭ではない。

階段下の、星奈さんの『家』。

もうすっかり闇に溶け込んだこの場所で、僕は横たわっていた。

この場所で横たわっているということは、その下は冷たく固い廊

下……かと思つたらそうではなく、むしろ柔らかかった。

そうか。掛け布団までは掛かつていないけど、星奈さんが敷いた布団の上だからか……。

ぼーっとした頭で考える。

右手が温かい。

さっきまでつないでいた手のひらの感触。それはまだ残っていた。残っていた、というよりも……今でもまだ温かく、ほのかに湿つていて、そして柔らかい。

あれ？

気づけば僕の右手は、今もしつかりと星奈さんの右手を握っていた。

え？ あれ？

まだ頭がはつきりしていなかったけど、僕はしつかりと目を開くと、目の前には、星奈さんの寝顔があった。

薄暗くはあったものの、窓から月明かりでも差し込んでいるのか、彼女の顔は微かな光に照らし出されていた。

安らかな寝息を立てるたびに、その吐息が感じられるほどの至近距離で、星奈さんが眠っている。

って、わああああ！？

慌てて起き上がろうとする、よりも早く、目の前の星奈さんのまぶたが動いた。

パチ……パチ、パチ。

三回ほど、目をパチクリと。
彼女の長い上下のまつげが重なり、バサツと鳴る音が聞こえるかのようだった。

「えっ、あつ、なん……えええ？」

慌てて飛び起きる星奈さん。

僕も同じように飛び起きていた。

「いや、あの、これは……その……僕はべつになにも……！」

ふたりとも布団の上に正座したまま顔を真つ赤にして焦りまくる。それなのに、手はしっかりと握ったままだったことに、遅まきながら気がついた。

「わわわっ、ごめんっ！」

僕は慌てて手を離す。星奈さんも、汗ばんだ手をずっと引つ込めた。

と、そんな様子をニヤニヤしながら眺めている観客の存在に、ようやく気づく。

「うーん、やっぱりなかなか新鮮だわあ」

ニコニコニコ。

中腰になって自分の膝の上に両肘をつき、手首を合わせて形作った両手の上にあごを乗せこちらのをのぞき込んでいるのは、言うまでもなくレイ子さんだった。

「レイ子さん!」「れーこちゃん!」

僕と星奈さんの声が重なる。

「息もピッタリね!」

相変わらずニヤニヤと笑みを浮かべたまま、そんなことを言う彼女。

「ちょっと、れーこちゃん、なんで、その……富永くんが……」

「ん? なんか、来ちゃったから。まあ、いいかなあって」

「え……っ!?!」

僕のほうも全然状況はわかっていなかったのだけど、それは星奈さんも同じのようで。

一番状況を理解しているであろうレイ子さんを問い詰め、説明させる流れとなった。

とりあえず、僕のほうは置いといて、星奈さんの混乱を解消するのを優先させる。レディーファーストだ。

僕の混乱の度合いのほうが大きいから後回しにしたらだけ、ってのもあるのだけど。

星奈さんが飛び回って『魔流』と戦っているときに僕がここに来たこと、レイ子さんに言われて手をつなぎ戦っている場面を見ていたこと、星奈さんが後ろから迫ってくる魔流の腕に吹き飛ばされそうになったとき、つないでいた手をぎゅっと握ると鼓動が重なり大きな光の流れとなって星奈さんの手から放たれ、魔流を校庭に沈めたこと。

レイ子さんはときどき大げさに噓し立てたりしながらも、これまでの経緯を説明した。

それを聞いた星奈さんは若干首をかしげながらも、どうにか状況は理解したようだった。

「僕は、生徒手帳を落としたみたいだったから、探しに戻ってきたんだ」

「あ……そっか。そうだったのね。うん、落ちてたよ。はい」

そう言っ て生徒手帳を手渡してくれる星奈さん。

受け取るときに指が触れて、さっきまで握っていた手の温もりを思い出し、一瞬ドキツとした。

星奈さんも同じだったのか、ほのかに頬を染めているように見えた。月明かり程度の薄暗い中だし、よくはわからなかったけど。

さて、問題は僕の混乱のほうだ。どこからどう説明していいものか、レイ子さんも星奈さんも困っている様子だった。

ともかく、まずはレイ子さんについて。

星奈さんが『れーこちゃん』と呼んでいたのは、レイ子という名前だから、ではなかった。

「まあ、俗に言う、幽霊ってやつなのよね、私」

事もなげに言っ てのける、当のレイ子さん。つまり、幽霊の霊子さん、だったと……。

「正確に言っ と幽霊とはちょっと違うのかもしれないけど。でも、ほら、冷たいでしょ？」

すっ と僕の手を握っ てくる彼女。確かに冷たい手のひらだった。

極端な冷え性、というのを乗り越して、明らかに体温がない感じではある。

……って、幽霊なのにどうして触れるの！？

「ん？ まあ、強い霊力の賜物って感じ？ 体温も再現できなくはないんだけど、疲れるからねえ」

今どきの幽霊っていうのは、昔よりも技術が進歩しているのかもしれない。ちよつと現実逃避気味な僕だった。

確かに、よく見ないとわからないけど、彼女の体は微妙に透けているようにも見えた。

「私も最初に会ったときは、びっくりしたんだよ」

と星奈さん。

「そうそう、驚いておしっこ漏らしちゃってたし」

「そ、そんなことしてないもん！」

星奈さんが慌てて否定する。

ニヤニヤ顔のレイ子さんを見る限り、彼女の嘘なのだろう。

「富永くん！ 今のは、れーこちゃんの嘘だからね！？」

僕の両腕をつかんで必死にそう訴えてくる。

うんうん、そこまで必死になって否定しなくてもわかってるのに。そんな星奈さんの様子も新鮮で可愛いかも、なんて思ってしまう。クラスではおとなしい彼女。ここまで必死に喋っている姿なんて見たことがなかったからだ。

それはいいとして。他に訊きたいのは……。

「で、あの『魔流』ってのはなに？ それにどうして星奈さんが戦ったの？ なぜ星奈さんはここでパジャマで寝てたのに、校庭のほうに行ってたの？ なんで校庭のほうではセーラー服だったの？ それから……」

矢継ぎ早の質問に、顔を見合わせるふたり。

「うーん、私もね、あまりよく知られてないんだ。れーこちゃん、私にもちゃんと説明してほしいんだけど」

そのまま星奈さんも僕と同じ質問する側に回った。
ふったりから詰め寄せられたレイ子さんは、それでも怯むことはなかったのだけど。

「校庭で戦ってた詩穂はね、幽体なの。幽体離脱とかって言うでしょ？ その幽体ね。あつ、でも体から離れてると弱って死んでしまふとかはないから安心して。セーラー服を着てたのは、最初に詩穂に幽体になってもらったのが中学生の頃だったからかな。そのときのクセで今でも無意識にセーラー服になっちゃってるんじゃないかしら」

幽体……だからあんなに高く飛び回れたりしたんだ。

「でも、どうして手をつないだら、校庭の状況が見えたの？」
「それは、文字どおりね。『つながり』によってふたりの気が同調して同じ空間を共有したの。もちろん誰でもそうなるわけじゃないのだけど。それはきつと、あなただから……」
「え？ それってどういうこと？」

「……ううん、なんでもない」

気にはなった。でも、このことはそれ以上訊かないでと彼女の瞳が語っているようで、僕はその件についてはなにも言えなくなってしまった。

ともかく、まだ訊きたいこと残っている。

「……それで、魔流ってのはいったい……」

「ううん、魔界から流れ出てくるもの……って感じかなあ」

レイ子さんも首をかしげる。

「れーちゃんでも、よくわからないの？」

「……うん、そうね。そんな感じ」

どうも曖昧な答えが返ってくる場合が多い。

とはいえ、今まで聞いた内容だけでも、にわかには信じられないような状況だ。

これ以上のことが怒涛のように押し寄せてきても、常識という名の防波堤が決壊しかねない。そんな気がしていた。

夜は、もうすっかり更けていた。

「あつ、富永くん！ もうこんな時間だよ？ 大丈夫？」

「うわっ！？ もう十二時回ってる！？」

腕時計を見て驚いた。

……あれ？ 星奈さんはどうして時間がわかったんだろう？

そう思って彼女のほうへ目を向けると、可愛いピンク色のウサギをかたどった置き時計を操作していた。

「目覚まし……。私、朝弱くって……」

見ると、うさぎ型の他にも、いくつかの目覚まし時計がすでに配置されていた。

「ごめんね、こんな遅くまで」

「ううん、私のほうこそ、ごめんなさい。その……」

一瞬目を伏せる彼女。

「私、富永くんにあんなとこ見られちゃって……恥ずかしい……」

そんな言い方すると、かなり誤解を招きそうな……。

「でも、その……、気味悪がったりしないで、また来てほしいな……」

……

「……うん、また来るよ」

「私も待つてるから！」

幽霊とは思えない元気な笑顔を振りまくレイ子さんと、眠気のためかトロンとした目の星奈さんに見送られながら、僕は彼女の『家』をあとにした。

はたして、あんなことがあったあとでちゃんと眠れるのかな。そんな心配もしていたのだけど。

星奈さんとの『つながり』によって疲れていたためなのか、伯母さんの家に無事たどり着き、部屋に滑り込んでベッドに寝っ転がった僕は、まるで瞬間技のように眠りに落ちていた。

ステップ4 歪んでる？ 日常に潜む非日常

「こら富永くん、よそ見るんじゃないやありません！」

「痛て！……すみません」

「まったく、たるんでるなあ。高校生になっただんだから、もっとしっかりしないとダメだぞ」

相変わらずの子供に言い聞かせるような口調で琴崎先生に叱られた。

二時間目の国語の授業中だった。

昨夜、あんなことがあったから、どうしても星奈さんが気になってしまふ。それで、授業中でもちらちらと彼女のほうに視線を向けてしまっていたのだ。

星奈さんの席は、僕から見ると右斜め前方にある。女子が圧倒的に多い学校で、入学したての状態。基本的に席順は出席番号順、つまり名前の順になる。

もともと女子校だったからか、出席番号では女子が先になっていた。必然的に出席番号の遅い男子が窓際に並ぶことになる。

星奈さんの席の方向は、僕から見るとちょうど教壇の向きではあるので、不自然ではないはず。そう思っていたのだけど、それでも視線の先がずれていると先生にはわかってしまふものらしい。

というわけで、教科書で叩かれてしまったのだ。

「懲りないな、お前も」

背後から鳥河のつぶやきが聞こえた。振り返らなくてもニヤニヤ笑っているのが手に取るようにわかる。

後ろの席からでは、僕がずっと星奈さんのほうを見ているのなん

て一目瞭然だったのだろう。

休み時間になると、小松さんが星奈さんの隣の席に陣取った。その席の子は、すでに違う子のもとへと行ってしまったあと、休み時間中ならずと席は空いているものと思われた。

昼休みにはその席の机を星奈さんの机と向き合わせて、一緒にお弁当を食べている小松さん。人の席でお弁当を食べるっていうのもどうなのかと思わなくもないけど、その席の子もまた別の席に座ってお弁当を食べていたりする。どうやらそういうものらしい。

そうやってグループごとに集まってお喋りしている、いつもと変わらない休み時間の光景だった。グループといっても、星奈さんと小松さんはふたりだけなのだけ。

ただ、星奈さんのすぐ前の席にも、なにやら別のグループができていた。

席の主は初吉はつよしよつは四葉さん。星奈さんのひとつ前の出席番号だし、学級委員に推薦されていたので名前もしっかりと記憶に残っていた。

その席に集まっているのはふたり。なかわたわかな中和田若菜さんと、さばつきつばさ鯖月翼だ。

鯖月は僕のひとつ前の席の男子で、中和田さんとはどうやら幼馴染みらしい。自己紹介で「中学ではサッカー部でした」と言った鯖月に、「幽霊部員だったじゃん!」とツッコミを入れた中和田さん。鯖月は、幼稚園の頃からの腐れ縁ってやつさ、と言っていた。

そんな仲のいいふたりの夫婦漫才とも思えるようなやり取り（なんて本人たちに言ったら真っ向から否定するんだろうな）を、温かな目で見つめて微笑んでいる初吉さん。そういう図式が成り立っている。

今日もそんな感じだったのだろう。なにか悪口と思われることでも言ったのか、中和田さんにつかみかかられている鯖月の姿が見え

た。

その勢いに驚いてバランスを取ろうと振り回した鯖月の手が、机の上に出しっぱなしだった初吉さんの布製のペンケースにぶつかる。ペンケースは大きく飛ばされ星奈さんの席の横に落ちた。

それに気づいた星奈さんがそつとペンケースを拾い上げ、初吉さんに手渡す。「ありがとうございます」とお礼を述べる初吉さんと、「ごめんね」と謝っている鯖月。

一番の原因とも言える中和田さんは、べつに私は悪くないもん、といった表情でそつぽを向いていた。

「あつ、ミツシイちゃんだよね？ それ」

そこで小松さんが声を上げた。「それ」とは、ペンケースにプリントされたキャラクターのことだ。

「ええ、子供っぽいって言われますけれど、好きなんですよ」

初吉さんは笑顔をさらに輝かせて答える。

「あははっ！ 子供っぽくなんてないわよ。私も好きだし。詩穂もこういうの好きだよね」

「うん……好き」

小松さんの言葉に遠慮がちに答える星奈さん。それを聞いて中和田さんが身を乗り出す。

「へえー。そんじゃあ、今度限定のポーチ持ってきてあげる。うちのお母さん、ミツシイちゃんグッズを作ってる会社の社長なんだよね」

「あつ、そうなんだ」

そんなこんなで、グループは今や五人へと急成長していた。こうやって輪が広がっていくものなのだろう。

昨日あんなことがあったばかりだから星奈さんが心配だったけど、どうやら彼女は大丈夫みたいだ。

「なにニヤニヤしてるんだよ、気持ち悪いいな」

思わず笑みを浮かべていた僕に、突然後ろから鳥河の声がかかる。

「と……鳥河！ いつの間に席に戻ってきたんだよ！」

「トイレに行つてただけなんだから、そりゃあすぐに戻るだろ。それより富永、混ざりたいなら行つてくればいいじゃんか」

「いや、べつに僕はそういうつもりじゃ……」

「はあ、まったく……。これだからお前は」

もうすっかり親友気取りなセリフ。でも不思議と嫌ではなく、そんな馴れ馴れしい鳥河にも、もうすっかり慣れていた。

ふと小松さんが星奈さんに耳打ちする姿が見えた。

何度か言葉を交わしているみたいだったけど、やがて星奈さんがこちらへ顔を向けてこう言った。

「あ……あの、富永くん！ こっち、来ない？ あ、鳥河くんも」

「え……あ、えっと……」

突然呼ばれて僕は戸惑ってしまった。

「ほら、お姫様がお呼びだぞ。行つてこい」

にやけ顔をさらしながら、鳥河が冷やかしてくる。

「お……お前も呼ばれたんだぞ！」

「ついでだったみたいだけどな」

そう言いながらも、鳥河は僕を先導するように席を立つ。そして僕と鳥河は星奈さんたちの輪の中に加わった。

とはいえ、話には加わったものの、授業の合間の休み時間は短いもので、すぐにチャイムが鳴ってしまったわけだけど。

席に戻る間際、小松さんが僕に小声でささやいた。「富永くん、ありがとね」と。

その後も僕たちは、休み時間のたびに星奈さんと初吉さんの机の周りに集まるようになっていた。

星奈さんとも話す機会が多くなり、僕としても学園生活が楽しくなったと言えるだろう。

初吉さんの言葉遣いがクラスメイトに対しても丁寧なのは、かなり大きなお屋敷のお嬢様だからということ。

鯖月と中和さんはやっぱりがよくて、どう考えてもつき合っているようにしか見えないのに、本人たちはどうしてもそれを認めないこと。

小松さんの両親は画家で、その娘である小松さんも期待されていたのだけど、本人いわくまったく才能がないことなどなど。

普段の他愛ない会話の中でも、お互いのいろいろな事情がわかってくる。

もちろんそれは嫌なことではなく、むしろそこが自分の居場所となるように、自分という存在が溶け出して染み込んでいくような、そんな感覚で心地よくすら思えた。

それは、以前は心を閉ざしていたという星奈さんにとっても同じだったようで、若干遠慮がちにはあるけど、グループ内で繰り広げられる話に参加して笑顔を見せていた。

そして小松さんは、そんな彼女の様子を見て満足そうに優しげな笑みを浮かべていた。星奈さんのことをどれだけ心配していたか、今の状況をどれだけ喜んでいるか、手に取るようにわかった。

そうやって集まるのも、授業の合間の休み時間と、お弁当を広げる昼休みだけだった。放課後になると、みんな不思議なほどあつさり教室から出ていってしまう。

まあ、部活に入ってる人もいるわけだし、そうでなくても早く帰りたいというのもわかる。

きつと鯖月と中和田さんはデートなのだろう。もちろん本人たちは「単に一緒に出かけただけでデートじゃない！」なんて否定するだろうけど。

鳥河はいつもどおり、いつの間にかいなくなっていた。そして、小松さんと星奈さんも、授業が終わるとすぐに教室から出ていった。小松さんはテニス部だったはずだから、部活に向かったのだろう。星奈さんは、『家』に帰ったのかな？

小松さんや初吉さんたちと仲よくなっただけど、星奈さんの『家』のことやレイ子さんの存在については話していない。

星奈さんがあの場所に住んでいるというのは、みんなも知ってい

るはずだ。でも、あえて話題にしないようにしているのだろう。

僕や星奈さんからも、わざわざ語ったりはしない。星奈さんは訊かれたら答えるかもしれないけど、僕が勝手に話してしまっている話題でもないはずだ。

午後の授業が終わったばかりの放課後。

今は桜の咲き乱れる春。この時間だとまだまだ暖かった。

星奈さんにはまた行くと聞いたけど、毎日『家』に押しかけるのはやっぱり迷惑だろうか。

僕はどうしようか迷っていたものの、それでもそのまま帰ろうという気にはなれなかった。

昨日のことを思い出したからだ。

——あれは、校庭だったよね。

自然と足は校庭に向けられていた。

ここ桜草学園は初等部・中等部・高等部が同じ敷地内にある。校庭もそれぞれで分かれていた。

状況によっては、例えば高等部の生徒が中等部の校庭を使ったりすることも可能ではあるのだけど、許可をもらう必要があるため、普通は高等部の生徒なら高等部の校庭を使う。

だから僕が普段使っている校庭も、高等部の校庭だ。

そして昨日見た光景は、薄暗くてわかりにくかったとはいえ、その高等部の校庭に間違いないはずなのだ。

だけど、あれだけの巨大な物体がいたというのに、まったく騒ぎになっていない。その疑問がずっと頭から離れなかった。

もちろん夜も遅い時刻になっていたのだから、生徒は残っていないかったかもしれない。先生方も通常は夜九時くらいには帰っている

だろう。でも、用務員のおじさんや宿直で残って見回りをする先生なんかはいるものじゃないだろうか。

仮に見回りの時間からずれていて気がつかなかったとしても、あれだけの巨体だったら、なにかしらの痕跡は残っているはず。

それに、都会というほどではないけど、住宅街の中に建てられた学校なのだから、あんな物体がいて激しい戦いがあったのなら、誰かに目撃されていてもおかしくはない。

だいたい、魔流の咆哮や繰り出した腕が地面を打つ音や、星奈さんが発していた光がヤツを切り裂く音だって周囲には響いていたはずだ。

星奈さんをつないだ手から鮮明な映像が僕の頭の中に流れ込み、それらの音も僕にはしっかりと聞こえていたのだから。

それなのに、まったく誰にも気づかれないというほうが不自然に思う。

そんなことを考えながら、僕は校庭へと足を踏み入れた。部活動に励む生徒たちの元気な明るい声が青空のもとで響いている。

そこに、異変はない。

魔流が沈み込んだはずの大穴はもとより、ちよつとした焦げ跡なんかも含め、まったくなんの痕跡も見受けられなかった。

——どうということだろうか？ あれはやっぱり夢だった？

いや、そんなはずはない。

僕は自分の手のひらをじっと見つめる。

星奈さんをつないだ手の温もりが、リアルに思い出された。

そして、そのつながりによって生じた感覚と流れ込む景色、音、

光――。

確かに信じがたい光景ではあった。それでも、それが夢や幻だったとは、どうしても思えなかったのだ。

もし夢や幻だったとしたら、星奈さんもレイ子さんも嘘をついていたことになるわけだし。

と、ふと違和感を覚えた。

違和感、というか、これは視線――？

周りを見回すと、部活に打ち込む生徒や校庭に向かって歩いてくる生徒がちらほらと見える。でも、誰も僕のほうに視線を向けてはいなかった。

変だな……。

そう思って首をかしげているそのときには、もうすでに違和感も消えていた。

……気のせいだったのかな？

校庭に向かう生徒が、立ち尽くしている僕に不思議そうな視線を向けてすれ違う。

ここにもって邪魔になるだけだ。

カバンは持ってきていたけど、やはり帰る気にはなれず、とりあえず僕は校舎内へと戻ることにした。

「おゝ富永じゃん、ちょうどよかった！」

校舎内に戻るやいなや、鳥河から声がかかった。お前、まだ残ってたんだ。

「ちよつと新聞部に顔を出してきた帰りさ。それより、面白いことを発見したんだ！」

そう言つと僕の腕をつかんで走り出す鳥河。新聞部の血が騒いでいるのだろうか、かなり興奮気味に見える。

なにがなんだかわからなかったけど、僕はその勢いにつられて一緒に走つていくしかなかった。

「ほら、あそこ。見てみるよ」

鳥河が指差した先は、中庭の花壇のある部分だった。そこには、

「なんだ、あれ？」

よくはわからないけど、なにかぼやけた感じに見える変な空間があった。

だけど、目を凝らしてみてもなにもない……？

「なにかがあるわけじゃなくて、ただ、空気が歪んでる？」

「ああ、そんな感じだ」

確かによく見てみれば、花壇の一部の風景が歪んで動いているような感じだった。

どうなっているのだろう。目の錯覚かなにかなのだろうか？

「それだけじゃない」

ガラツ。

鳥河はおもむろに窓の鍵を開け、一気に開け放った。

「……あれ？」

開け放たれた窓から見える景色は、さっきの花壇のままだったけど、今度はまったく歪んだりしているようには見えなかった。

動かされた窓のほうも見てみる。でも、そちらにも異変は見当たらなかった。

とすると――。

今は動かされて別の方向を透かしている窓のほうに注目する。ちよつと見る位置をずらし、その窓を通してさっき歪んでいたのと同じ場所を改めて眺めてみても、まったく歪んだ空間なんてなかった。

「どういうこと？」

「さあな、俺にもよくわからないが……」

そう言いながら、鳥河は再び窓を閉める。
すると、

「あつ」

閉じた窓を通した向こう側の花壇には、やはり再び歪んだ空間が発生し、なにやらうごめいているのがはっきりと見て取れた。

「こんな感じで、こつち側にある状態の窓を通したときだけ、あの歪みが見えるみたいなんだよ」

鳥河はさらに、一枚の写真を僕の目の前に差し出した。写真といっても、どうやらデジタルカメラで写した映像をプリントアウトしたもののようだったけど。

そこには、今僕の目の前にあるのと同じ風景が写っていた。そして、その写真の中に見える花壇も、やはり歪んでいた。

デジタルなデータなのだから、現像時のミスで偶然写ったように見えただけ、ということもありえない

もちろんデータに手を加えたという可能性は残るけど、

「写真に撮ってもこのとおりだ。原因はわからないが、なかなか新聞部魂がうずいてくる。桜草学園七不思議のふたつめはこれで決まりだな！」

とても嬉しそうな笑顔の鳥河を見る限り、それもないだろう。それにしても、この活き活きとした笑顔。新聞部という生き物は、こういうものなんだな。

「……って、ふたつめ？　ひとつめってなに？」

「そりやお前、特別教室棟東側の階段下のお化けで決まりだろ！」

……レイ子さんの存在って、実はすでに結構知られているのだろうか？

確かにあの人なら、あまり気にせず人前に出そうだとは思っけど……。

「でも、これがふたつめって、残りの五個は？」

「そりゃあれだ、これから頑張って探す……」

一気にトーンが下がり弱気な声になる鳥河。

以前聞いた星奈さんの両親の事件から続いていたという怪現象は、不思議と詳細な話が残っていないものも多く、今現在では目撃されることもなくなっているのだという。

「ま、ともかく。これは久しぶりのスクープだ！ 帰って記事を書かないと！」

再び興奮を取り戻した鳥河は、意気揚々とスキップしながら昇降口を目指して走り去っていった。

帰るなら僕と一緒に門まで行けばいいのに。

そう考えて、ふと気づいた。

あれ、ここって、特別教室棟のすぐそばじゃないか。ここからなら、星奈さんの『家』も近いな。

迷惑かもしれないとは思ったけど、やっぱり気になっているのは事実だ。

それに、単純に星奈さんと会いたかった。

——行ってみよう。

僕の足は、自然と階段下のあの場所へと向かっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3802y/>

階段下マイホーム

2011年11月10日03時05分発行